

「先祖からの歴史終わった」

原発事故 避難続く夫妻

故郷・浪江町への思い

東日本大震災の発生から11日で13年になるのを前に、震災に伴う東京電力福島第1原子力発電所の事故を受けて福島県浪江町から富士市に避難している堀川文夫さん(69)、貴子さん(70)夫妻がこのほど、伊豆の国市の葦山時代劇場映像ホールで講演した。解体せざるを得なかった自宅への思いや故郷の現状などを切々と語った。

(伊豆日日新聞 水口武彦)

伊豆の国支援団体が講演会



故郷への思いなどを語る堀川文夫さん(左)と貴子さん
＝伊豆の国市の葦山時代劇場映像ホール

はじめに震災と原発事故の記憶をつづった絵本「手紙 お母さんへ」を朗読した。貴子さんは「先祖からの歴史が終わった。一度とこんなことが起きないよう、事故のことを忘れないでほしい」、文夫さんは「故郷を奪われた多くの人の思いが記憶から消える。理不尽な命の軽視や帰還政策には怒りさえ覚える」と振り返った。

自宅解体と庭の木々伐採の様子を知人の映像作家が撮影・編集した動画も上映した。文夫さんは「両親が建てた家で、自分も妻と結

になる。「残りの人生を浪江町で過ごしたい」という気持ちが日に日に大きくなっていく」という。国の復興政策で移住者や新しい建物が増えたものの「住民2千人のうち元の町民は千人でそのほとんどが高齢者」とし、「全く違う町になってしまった」と複雑な思いも抱いている。

婚して住む時に建て直すに改装で済ませる発が壊れただけで、その歴史を閉じなければならなかった」と涙ながらに語った。文夫さんは来月70歳

今回の講演会は、伊豆の国市で長年にわたって震災の被災者支援に取り組む「福島を考える起き上がりこぼしの会」(市川幸子代表)が企画した。市川さんは「堀川さん夫妻の話は決して人ごとではない。今自分に何ができるかを考える糸口にしてほしい」と話した。100人以上が来場し、2人の話真剣な表情で耳を傾けた。